遊里

戸に連行ん、我にあたへまじやといへば、山奥のかゝる所にありて、若我死せば狼の餌食ともならん、夫いと幸なり、つれ行て命を全くし給れといふ、女衒歡びて金貳分を老女に與へければ、老女も悅びけるとなん、是後に巴屋の岩こすとて、全盛の君となりたるといふ事を、年經て聞けり、其虛實はしらず、同藩の大山氏なるもの、此岩こすに逢けるに、夏の頃なりしが、嚮の外に來りて、禿を呼で水を取よせ、其半呑て、暑しやと問ふ、大山暑しと答ふ、其時その茶碗を持て嚮に入り、のみさしたる水をのまする心かとおもふに、さはなくておのれ一口呑て、大山が寐たる顏に向ひて、ふつと霧を吹かけたり、顏より髮襟のあたりまで、水にぬれければ、驚きて起上る、岩こす笑て、呑たるよりは涼しからんといひしとなり、凡妓の氣骨にはあらず、一談を聞ても察すべきなり、

〔賤者考〕此情を鬻ぐ女、昔の種類は、いかにわかれたるか委しくは知りがたし、船はつる湊やうの所々には、遊女、今藝妓にあたるもの傾城今女郎にあたるもの共にあり、もし又一方のみありける所もあるべし、○中略さて、又湊ならぬ所も、繁花の地にはありけむことは、都は勿論奈良の木辻、近江の鏡、參河の矢矧、美濃野上、赤坂、鎌倉に大磯、化粧坂、喜瀨川、手越などなり、近江の朝妻、尾張の井戸田、遠江の池田などは、なほ船はつる方によりたるなるべし、海邊にては津の國の江口、神崎、蟹島、堺の乳守、播磨の室津、周防の室積、和泉の高淵、越前の三國、備後の尾道、其外古く名にきこえたる所枚擧しがたし、

〔朝野群載三記〕遊女記

自山城國與渡津浮巨川、西行一日、謂之河陽、往返於山陽南海西海三道之者、莫不遵此路、江河南北、邑々處々、分流向河內國、謂之江口、蓋典藥寮味原厨、掃部寮大庭莊也、到攝津國、有神崎蟹島等地、比門連戸、人家無絕、娼女成羣、棹扁舟、著旅舶、以薦枕席、聲遏溪雲、韻飄水風、經廻之人、莫不忘家、州盧浪花、釣翁商客、舳艫相連、殆如無水、蓋天下第一之樂地也、○中略相傳曰、雲客風人爲賞遊女、自京洛向河